

学校の在り方地区検討委員会（下北地区）

《 検討結果報告書（案） 》

令和8年5月〇日

目 次

1	中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み.....	1
2	学校の在り方に関する主な意見.....	2
	(1) 目指す学校像.....	2
	(2) 単位制.....	2
	(3) 少人数学級編制.....	2
	(4) その他.....	2
3	全日制課程の学校規模・配置.....	3
	(1) 委員の意見に基づく学校配置シミュレーション.....	3
	ア 学級減で対応.....	3
	イ 統合で対応.....	4
	(2) シミュレーション以外の学校規模・配置等に関する意見.....	5
4	定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見.....	6
5	その他.....	6
	【参考1】委員名簿（下北地区）.....	7
	【参考2】オブザーバー名簿（下北地区）.....	8

【参考3】学校の在り方地区検討委員会の開催状況（下北地区） 9

【参考4】地区懇談会（令和7年10月実施）等の主な意見 9

1 中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み

		東青	西北	中南	上北	下北	三八	県計
中学校卒業 予 定 者 数	R9	2,208人	827人	1,933人	1,442人	479人	2,265人	9,154人
	R14 (対R9)	1,894人 (△314)	756人 (△71)	1,816人 (△117)	1,343人 (△99)	392人 (△87)	2,027人 (△238)	8,228人 (△926)
	R19 (対R9)	1,489人 (△719)	552人 (△275)	1,399人 (△534)	1,086人 (△356)	285人 (△194)	1,508人 (△757)	6,319人 (△2,835)
県立高等学校 募集学級数	R9	42c1	17c1	36c1	32c1	12c1	37c1	176c1
	R14 (対R9)	36c1 (△6)	15c1 (△2)	34c1 (△2)	27c1 (△5)	11c1 (△1)	35c1 (△2)	158c1 (△18)
		37c1 (△5)	15c1 (△2)	35c1 (△1)	27c1 (△5)	11c1 (△1)	35c1 (△2)	160c1 (△16)
	R19 (対R9)	29c1 (△13)	11c1 (△6)	27c1 (△9)	22c1 (△10)	9c1 (△3)	26c1 (△11)	124c1 (△52)
		30c1 (△12)	11c1 (△6)	27c1 (△9)	23c1 (△9)	9c1 (△3)	27c1 (△10)	127c1 (△49)

※ 募集学級数の上段は、現行どおりの学級編制とした場合、下段は、商業科及び家庭科で少人数学級編制を実施した場合。

※ 中学校卒業予定者数は、各年3月の見込み。

※ 地域校及び令和10年度に配置する地域共育校は、学級数が変動する可能性があるため、西北・上北・下北・三八地区においては、募集学級数に変動が生じることがある。

2 学校の在り方に関する主な意見

(1) 目指す学校像

- 遠隔教育の推進による学校づくりが必要である。
- 対面授業等のアナログな部分も大事にしていく必要がある。
- 地元の大学との連携・協働は大事である。
- 全ての県立高校の生徒が自ら望む科目を履修し単位取得ができるよう、遠隔教育の推進や単位の認定制度の改善を行ったり、県内の専門学科がある高校の施設設備を他の高校の生徒が利用できるようにしたりするなど、全ての教育資源を全ての県立高校生に開放してほしい。また、下北地区統合校をこのモデル校としてほしい。

(2) 単位制

- 単位制を導入するに当たり、教員と教室を確保する必要がある。

(3) 少人数学級編制

- 学級減ではなく、少人数学級編制で対応することも考えられる。
- 1学級40人の学級編制の見直しを検討する必要がある。
- 教育にお金は惜しまないという気持ちがあれば、知事の判断で30人学級編制とすることも可能であるとする。
- 1学級40人の学級編制は本県の実情に合っていないため、機会を捉えて国に訴えていく必要がある。
- 少人数学級編制による教育的効果が期待されるため、普通科での実施も検討する必要がある。

(4) その他

- 田名部高校、下北地区統合校、大間高校を存続させることで、下北地区の教育の質を保障できる。
- 生徒や教員が減ることを逆に強みにできるような考え方や仕組みづくりが大事である。
- 田名部高校以外の教員についても兼務発令を行い多様な科目履修を実現してほしい。

3 全日制課程の学校規模・配置

(1) 委員の意見に基づく学校配置シミュレーション

ア 学級減で対応

第2期実施計画	前期実施計画	
R 9	R 1 4	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">田名部 5学級</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">統合校 5学級</div>	Δ1学級 →	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">田名部 4学級</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">統合校 5学級</div>
10学級	→	9学級
【地域校】 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">大間 2学級</div>		【地域共育校】 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">大間 2学級</div>
12学級	→	11学級

※ 青森県立高等学校教育改革推進計画基本方針において、2学級規模の地域校については、入学者数が1学級規模の募集人員である40人以下の状態が2年間継続した場合、原則として翌年度に1学級規模とすることとしており、大間高校の令和7年度及び8年度の入学者数はこれに該当している。

シミュレーションに関する意見

- 田名部高校の募集人員を減らせば、大間高校を希望する生徒は必然的に増えると考ええる。
- ◇ 学級数が減っても教員増配置が確実に実現されるのであれば、1学級減も理解できる。

○：シミュレーションの基となった意見

◇：シミュレーションに対する意見

イ 統合で対応

第2期実施計画	前期実施計画	
R 9	R 1 4	
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">田名部 5学級</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">統合校 5学級</div>	△1学級 →	<div style="background-color: yellow; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">新設校</div> 9学級
10学級	→	9学級
【地域校】 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 5px;">大間 2学級</div>		【地域共育校】 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 5px;">大間 2学級</div>
12学級	→	11学級

※ 青森県立高等学校教育改革推進計画基本方針において、2学級規模の地域校については、入学者数が1学級規模の募集人員である40人以下の状態が2年間継続した場合、原則として翌年度に1学級規模とすることとしており、大間高校の令和7年度及び8年度の入学者数はこれに該当している。

シミュレーションに関する意見

- 将来的には田名部高校と下北地区統合校の1校2キャンパス制も考えられる。

(2) シミュレーション以外の学校規模・配置等に関する意見

<学科等>

- 田名部高校や大間高校への新しい学科の設置を検討してほしい。
- 理系分野の学科が必要である。
- 下北地区統合校に原子力エネルギー科を設置してはどうか。
- どの高校で何を学べるかが大事であり、原子力関連等の地域産業を生かした学びを提供するなど、地区外から生徒を呼び込むような方策を考えるべき。
- 未来デザイン科の設置は大間高校が妥当であると考えられる。
- 未来デザイン科は、産業界や行政との関わりが強く求められる学科であることから、下北地区の取組が特徴的なものになるよう、話し合いながら地域が関われるようにしていきたい。
- 学級減だけでなく学科の改編等も含めて考えていかなければ、10年間の生徒数の減少に対応できる学校にならない。

<その他>

- 田名部高校への「特進コース」の設置や、下北地区統合校における専門知識の習得に向けての多様な学習環境の整備が必要であり、生徒が学びたいことを学べる環境と、自分の学力にあった適切な学びが受けられることを6地区ごとに保障すべき。
- 県が責任をもって生徒の通学環境を整備するのであれば、将来的には大間高校がなくなっても仕方ない。
- 大学進学に重点を置く高校と職業教育を主とする高校の棲み分けが必要である。
- 学校配置の基本方針に「高校教育を受ける機会の確保」と「充実した教育環境の整備」の2つの観点のバランスとあるが、バランスは地域によって違う。
- 大間高校の2学級規模を維持してほしい。
- 大間高校が1学級規模になっても少人数学級編制を実施した上で教員数も確保し、多様な教育を提供してほしい。
- 地域社会に関する学びと大学進学に対応する必要があるため、大間高校が1学級規模となった場合でも教員配置への配慮をしてほしい。
- 「6地区ごとに、中学生のニーズを考慮しながら、様々な役割を担う学校を配置」とあるが、「学力層の差」について解決策が示されたものではないのではないか。
- 学級数の維持に固執するものではないが、各校で何を学べるのかが分からない以上、判断ができない。

4 定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見

- 工業高校の定時制課程という選択肢があれば、下北地区の生徒も選ぶ可能性があるのではないか。
- 夜間は公共交通機関がなく通学困難な生徒がいるため、昼間定時制課程の設置が必要である。その上で、昼間部、夜間部の枠を超えて学習時間帯を選択できるようにしてほしい。
- 北斗高校の通信制課程ではスクーリングが負担であることから、田名部高校にも通信制課程があればよい。
- スクーリングの場所として公共施設等の活用も検討すべき。
- 田名部高校の定時制課程を大湊高校に移転し、通信制課程のスクーリングを併せて行うことも一つの方策である。

5 その他

- 地区懇談会で出された意見や県教育委員会が実施したアンケート結果は反映してほしい。
- 生徒が学びたい教科を専門の免許を所持している教員から確実に学べるように教員の確保をお願いしたい。
- 下宿を増やすなど通学時間が短くなるような対応を検討してほしい。
- 県主導によるスクールバスの運行等通学支援について考えてもらいたい。
- 高校奨学金通学費等返還免除制度の所得制限の見直し等については、実施計画策定を待たずに検討してほしい。
- いじめの少なさや、他にはないユニークな取組をアピールして生徒を呼び込むべき。
- 大間高校が1学級規模になると希望する生徒は減ってしまう。活性化を図るにも教員数が必要である。
- 定時制課程・通信制課程は生徒数が増加傾向にあり、きめ細かな対応が難しい状況にあるため、加配等の配慮により、これまでと同様の指導ができる環境を整えてほしい。
- 国の高校教育改革の基本方針を踏まえ、地域総合学科の設置、特色ある普通科及び専門学科の設置、全ての教育資源の開放によるユビキタスな環境の構築が求められる。
- 後期実施計画期間において、1校2キャンパス制又は2校による高度連携の普通科及び専門学科とした上で、地域総合学科制を構築してほしい。また、普通科は学際領域科（1学級）を新設し、専門学科（小学科）については、拡充を図るとともに少人数化及びくり募集を実施してほしい。
- むつ養護学校への通学に係る負担が大きいため、大間高校に分教室を設置してほしい。

【参考1】委員名簿（下北地区）

区 分	職 名 等	氏 名	備 考
市町村長	むつ市長	山 本 知 也	
	大間町長	野 崎 尚 文	
	東通村長	畑 中 稔 朗	
	風間浦村長	富 岡 宏	
	佐井村長	太 田 直 樹	
学校教育	むつ市教育委員会 教育長	阿 部 謙 一	
	大間町教育委員会 教育長	岩 本 浩 也	
	東通村教育委員会 教育長	奥 島 涼 子	
	風間浦村教育委員会 教育長	村 上 純 一	
	佐井村教育委員会 教育長	曾 根 智 子	
	むつ市立田名部中学校 校長	岸 健一郎	
	元県立田名部高等学校 校長	今 井 啓 之	進行役
	元県立むつ工業高等学校 校長	久 慈 恵 司	
P T A	むつ市立大畑小学校 P T A 会長	坂 部 大 介	
	風間浦村立風間浦中学校 P T A 会長	中 塚 将 行	R7. 11. 14～R8. 3. 31
	大間町立大間中学校 P T A 会長	伊 藤 満 治	R8. 4. 22～
産 業 界	むつ商工会議所 監事	高 屋 龍 一	
	風間浦村商工会青年部 部長	高 瀬 晋 平	

【参考2】オブザーバー名簿（下北地区）

■ 令和7年度

職名	氏名	備考
県立田名部高等学校 校長	山 田 昭	
県立大湊高等学校 校長	伊 藤 文 一	
県立大間高等学校 校長	米 田 智	
県立むつ工業高等学校 校長	野 呂 政 幸	

■ 令和8年度

職名	氏名	備考
県立田名部高等学校 校長	山 田 昭	
県立大湊高等学校 校長	庭 田 浩 之	
県立大間高等学校 校長	米 田 智	
県立むつ工業高等学校 校長	幸 山 敏 克	

【参考3】学校の在り方地区検討委員会の開催状況（下北地区）

	年月日	内 容
1	令和7年11月25日	○ 学校の在り方について ○ 学校配置について
2	令和8年 2月 3日	○ 学校配置について
3	令和8年 4月22日	○ 学校配置について
4	令和8年 5月19日	○ 検討結果報告書（案）について

【参考4】地区懇談会（令和7年10月実施）等の主な意見

<学校の在り方>

- 地理的に不利な地域であるため、遠隔授業などのテクノロジーを活用した学校づくりに期待している。
- 将来、地域に貢献できる人財を育成する高校が必要である。進路の選択肢を広げるため、特進コースのようなものがあれば良いのではないか。一方、学力だけでなく生きる力を育むことに力を入れた高校の配置も望まれる。
- 夢や志を実現するために選抜性の高い大学等への進学を希望する生徒に対し、高いレベルの学力を身に付けさせる必要があることから、高度な学びを行う学科を有する学校を配置してほしい。
- 農業科を設置してほしい。（今年、国が米の増産へ農業政策を転換したが、米の増産に寄与できるよう下北にも米農家が必要である。稲作や農業経営、気候変動に対応できる農業を学べると良いと思う。）
- 発達障害など神経発達症のこどもが増えているので、高校入学後もサポートが途切れないよう、通級指導教室の設置をお願いしたい。

<学校配置>

- こどもが減っているため統廃合は仕方ないが、一極集中しすぎている。せめて小規模の進学校を県内に満遍なく設置することはできないか。
- 夜間定時制への通学が困難なので、昼間定時制の設置をお願いしたい。
- 昼間定時制は、中学校卒業後の選択肢として必要だと思う。
- 通信制課程や昼間定時制課程を設置するなど、多様な学習環境を充実させるよう検討してほしい。
- 不登校特例校の設置を望む。
- 下北地区は地理的な制約が大きく自己完結性が必須である。定員や定時制・通信制のことも含め、決して他地区と同様の条件で語ってほしくない。

<その他>

- この地域は自己完結性が必須なので、特例として1学級の定員を25人や30人に引き下げてもらえればうれしい。公平性ということであれば、特定の学科だけでも検討し

てほしい。

- 少人数学級のメリットもあるので、人口減少に比例して学級を減らすのではなく、12学級を維持するなど、弾力的な対応も選択肢として残すべきではないか。
- 教育活動を充実させていくためには、一定の学校規模を維持することが重要であるため、地域共育校の特色として少人数学級編制により生徒の定員を引き下げ、1学年2学級を維持していく必要があると思う。
- 部活動が終わった後は公共交通機関やスクールバスがなく、保護者の送迎が必須な地域がある。県からバス事業者へ運行時間の延長等をお願いしてほしい。
- 基本方針に「通学困難な地域が新たに生じないように配慮する」とあるが、既に通学困難な地域がある。通学の経済的な負担の軽減が最も必要である。
- 「高校奨学金通学費等返還免除制度」は所得制限があり、一般家庭はほとんど対象にならない。他地域より交通費が高額になるため、立地だけでなく、経済的な面でも通学が困難にならないようお願いしたい。
- 第2期実施計画における統合校の議論の中で、この地域でどのような学びが必要かというのは、むつ市や下北地区統合校検討委員会から要望が出されているので、地域の意見として学校の在り方地区検討委員会でも取り上げてほしい。

【参考】下北地区統合校検討委員会からの要望（R6.11）の一部

- ・世界中の学校と交流できるグローバルな教育を実現すること。
- ・多様な生徒がものづくりを通じて、実社会で通用する技能を育成しながら資格取得を目指すことが可能となる、工業高校の良さを最大限に生かした定時制課程を併設すること。
- 全ての県立高校に通級指導教室を設置してほしい。
- 学びの多様化学校又は昼間定時制課程を設置してほしい。
- 少人数学級編制の導入に普通科が含まれないことに反対である。
- 令和9年度の大間高校の募集学級数が2学級か1学級か明確にすべき。
- 普通科を未来デザイン科に改編する意義がわかりづらい。
- 通信制課程で行われるスクーリングに係る通学の負担軽減に向けた取組を「検討」するとしているが、「実施」するに改めるべき。
- 学びたいと思ったときに学べる環境が求められており、専門性の早期の固定化は、逆に生徒の可能性を奪うことにつながるおそれがあるということは考慮すべき。
- 生徒数の推移だけでなく、教員数の推移、校舎の老朽化の状況、県予算の状況、それらを踏まえた学級数の削減や学校の統廃合についての長期的な方向性を提示して議論すべき。
- 全県的に少人数学級編制や通学支援を求める意見があることから、前期実施計画に反映してほしい。